

史学科・史学研究会の五十年 ― 原点としての「別府史学」 ―

史学研究会会長 山本晴樹

二〇一三年(平成二十五年)は、史学科および史学研究会が一九六三年(昭和三十八年)に創立されて五十年目という記念すべき年であった。五十年といえば半世紀にあたる。この期間を長いとらえるか、短いとらえるか、ひとそれぞれであろうが、この史学科に一九七五年(昭和五十年)に赴任した筆者にとって、この五十年間の半分以上を史学科で過ごしてきたので、感慨深いものがある。思い出すのは、赴任したとき当時の主任教授であった賀川光夫先生(一九二二―二〇〇一、初代史学研究会会長・名誉会長)が、ご自身別府大学には前身の別府女子専門学校・別府女子大学も含めてすでに三十年近く勤められていたので、「君、三十年なんてあっという間だよ」と言われたことだった。おそらく、時間はこちらまち過ぎていくから、こころして勉強しなさい、という意味で言われたと今になって気づくのだが、その時は若かったせいもあり、「そんなことはないだろう」とたかをくくっていたら、本当に三十年はあっという間に過ぎ、四十年近くになってしまった。反省することしきりである。

この五十年を踏まえて思うことは、やはり「初心忘るべからず」である。とりわけ、今後の見通しが不透明である現在こそ、もう一度出発点に戻って初心(原点)を確認しておくことが重要であろう。史学科を創設された先生方が何を思い、何を目標として掲げたかをここであらため

てふりかえってみたい。その際、参考になるのが、創設期のメンバーのひとりであった今永清二先生(東洋史担当)の文章である。これは、賀川先生が古稀を迎えられた一九九三年(平成五年)、奇しくも史学科創設三十年目に書かれたものであるが、史学科創設期の精神が見事に描かれている。

「かくして五年が過ぎ、昭和三十七年になった。この間、先生の精力的な学術調査によって、東九州の古代史、特に宇佐の古代文化と朝鮮との関係など文化交流の実態が、法鏡寺や虚空蔵寺などの調査からクローズアップされた。私も、中国イスラム社会史研究に一步ずつ深入りしていった。こうした中で、史学科を創設してはということになったのである。

この時の合言葉が「別府史学」である。自由な学風の下、別府という土地にあって、別府大学でしか出来ない歴史研究をやるうではないか。研究費や施設は十分でないにしても、未来に向かって問題提起の出来るような、時代を見据えた研究にそれぞれ努力しようではないか。そうした姿勢を「別府史学」と称したわけである。河野房男先生や後藤重巳先生の思いも同じであった。「キーワードは「別府史学」」「賀川光夫・人と学問」賀川光夫先生古稀記念事業会編一九九三年一四七頁)

ここには、九州の地で私学として最初の史学科をつくる気概がみなぎっている。この思いで賀川先生をはじめとする各先生がたは、研究・教育に邁進されたのであろう。同じ思いは、もちろん賀川先生の文章にもうかがわれる。以下は史学研究会の機関誌『史学論叢』の創刊号（一九六五年）の巻頭辞として書かれたものである。

「別府大学文学部に史学科が設立せられたのは昭和三十八年四月で、その設立の意義は地方史研究の発達に寄与することはもちろんであるが、そのような状態から脱出して謙虚に世界史的史実を究め、そこから人類文化に必要な要素を正しく指摘しようとするところにある。今日大分県の一地方史ではなく、大分県に在住する歴史学者の精鋭が中心となって、眼を世界史の広い範囲に見開き、歴史学、考古学、民俗学などの立場から科学的真実の追究をめざして、研究誌「史学論叢」を刊行することになった。」（『史学論叢』創刊の辞、昭和三十九年十二月十五日）

見落としてならないことは、「別府史学」を掲げているからといって、地域史を前面に押し出しているわけではないということである。お二人の文章のなかで、繰り返し強調されているのは、別府という土地にあっても地域史のみに目をうばわれるのではなく、常に世界史的視野を持たなければならない、ということである。それが故に、史学科の構成は考古学専攻が中心ではあっても、最初から日本史、東洋史、西洋史の各専攻を備え、幅広い視野で歴史を見据えていく姿勢を打ち出していた。このことはたとえば賀川先生や今永先生の国を越えた実に幅広くそして深い学術交流にみとれる。

この史学科の原点である「別府史学」に関連して、現在史学・文化財学科で西洋史を担当する私個人に引き寄せて言えば、第二次世界大戦下のレジスタンス運動で倒れた中世史家マルク・ブロック（一八八六一—一九四四）と並んで、フランスの「新しい歴史学」の創立者リュシアン・フェーヴル（一八七八—一九五六）の次の文章が思いだされる。

「：歴史学にとって、まさに「人びと」こそ唯一の対象だからです。換言すれば、捕らえどころのない抽象的な永久不変の人間が対象なのではなく、いつも社会の枠組みの中で把握される人びと、発展段階の一時点にある社会の成員としての人びと、混じり合いぶつかり合い、対立し合い、ついには「生」とよばれる妥協的な和平、和解に達する多様な機能・関心・能力を具えた人びとです。」

このように規定した人間を捉えるにあたり、便宜上、身体のある部分、たとえば頭より手とか脚を掴むこともできるでしょう。でも、その部分を引き寄せるや否や身体全体がつかまえます。この人間をバラバラに切断することはできない。そんなことをすれば死んでしまいます。」（長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』平凡社ライブラリー一九九五年四十二頁）

ここには、常に「人間」を史料の中に見いだせ、という強いメッセージがある。どんな地域のどんな時代の歴史のなかからも、「人間」に関わる歴史が引き出せるのであろう。その意味では、われわれの「別府史学」は第二次世界大戦後の歴史学界に大きな影響を及ぼしたリュシアン・フェーヴルの「新しい歴史学」と響き合うものがある。今後も自信をもって「別府史学」を受け継いでいきたい。